

雅歌全般 「男女の結びつき」

1A 婚姻前 1-4

1B 求婚 1-2

2B 結婚 3-4

2A 婚姻後 5-8

1B 倦怠 5-6

2B 円熟 7-8

本文

私たちは前のセッションで、男と女のそれぞれの神から与えられた役割を見ました。今朝は、その男と女がどのように結ばれていくのかを見ていきます。それを、雅歌全体を眺めることによって見ていきたいと思えます。

1A 婚姻前 1-4

1B 求婚 1-2

1:1 ソロモンの雅歌

「雅歌」というのは、直訳では「歌の中の歌」という意味です。これはその表現のごとく、最上の歌ということです。伝道者の書では、「空の空」というのがありましたが、「空しさ中での空しさ」という究極の空しさが書かれていましたが、ここでは歌の中の歌を読んでいきます。

ソロモンという人物ですが、「1列王 4:32-33 彼は三千の箴言を語り、彼の歌は一千五首もあった。彼はレバノンの杉の木から、石垣に生えるヒソプに至るまでの草木について語り、獣や鳥やはうものや魚についても語った。」とあります。ソロモンは、非常に知恵のある人、とても聡明な人であっただけでなく、美意識の強い人でした。歌を一千五首も作っています。さらに、自然の生き物に対して並々ならぬ興味と情熱がありました。ソロモンがそれでこの雅歌を歌にして、さらに夫婦の愛を自分の周りにある植物や動物に喩えながら、表現していきます。

ソロモンが、一つ知られていることがあります。女です。箴言の中にも、また伝道者の書にも、女についての教えが数多くあります。彼は、数多くの妻、実に三百人の妻がいました。そして七百人のそばめがいました。そのために、女たちによって自分が苦しみを受けたことを話しています。箴言においても、伝道者の書においても、そうした女についての苦々しさの中で、若いころからの妻については、そのすばらしさをたたえる言葉を残しています。「箴言 5:18-19 あなたの泉を祝福されたものとし、あなたの若い時の妻と喜び楽しめ。愛らしい雌鹿、いとしいかもしかよ。その乳房がいつもあなたを酔わせ、いつも彼女の愛に夢中になれ。」そして箴言の最後には、真珠よりもはる

かに尊い、しっかりとした妻について書いています。伝道者の書には、「9:9 日の下であなたに与えられたむなしい一生の間に、あなたの愛する妻と生活を楽しむがよい。それが、生きている間に、日の下であなたがする労苦によるあなたの受ける分である。」とありました。

それでソロモンは、雅歌を書いています。これは、宮廷に数多くいる女たちの中で、たった一人の「シュラムの女(6:13)」と呼ばれている女をソロモンが愛している歌です。そしてこの女も、ソロモンを愛してやまない、その歌が書かれています。実に雅歌は、この二人が愛し合い、そして結婚し、そして結婚が熟していく、夫婦の愛を豊かな表現によって歌っています。そして昨日見たように、夫婦愛は、神の創造された秩序を支える根本になっています。「男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである。(創世 2:24)」一心同体というところに、最も親密な関係、性の営みがあることは言うまでもありません。主が与えておられるその基本に、性の営みを含む親密な交わりがあるということを感じたいと思います。そして、エペソ 5 章にあるように、それがキリストと教会の一体の関係を表しており、夫婦関係の中でキリストへの愛を私たちは知っていくことができるのです。

雅歌の全体の構成として、1 章から 4 章の前半部分と、5 章から 8 章の後半部分に分かれます。前半は婚姻に至るまでの二人の歩み、そして後半は結婚後の二人の夫婦生活が描かれています。求婚から結婚に至るまでの心の通わせ方、それからその後どのようにして夫婦の危機を乗り越え、円熟していくのかを見ていきます。

1:2 あの方が私に口づけしてくださったらよいのに。あなたの愛はぶどう酒よりも快く、1:3 あなたの香油のかおりはかぐわしく、あなたの名は注がれる香油のよう。それで、おとめらはあなたを愛しています。1:4 私を引き寄せてください。私たちはあなたのあとから急いでまいります。王は私を奥の間に連れて行かれました。私たちはあなたによって楽しみ喜び、あなたの愛をぶどう酒にまさってほめたたえ、真心からあなたを愛しています。

雅歌は、ソロモンの一人の女とのやり取りによって成り立っています。そして応援団のように、エルサレムの娘たちがこの女に付いていっています。一人がソロモンを独唱し、他の誰かが女の分を独唱し、そして娘たちの部分は複数が合唱していたのでしょうか。この女についてですが、6 章 13 節にて「シュラムの女」とあります。イスラエルの町の名前で「シュネム」があります。メギドがあるイズレエル平野の西側にあり、北はガリラヤ、そしてヘルモン山があり、レバノンがあるという自然に恵まれたところです。シュラムはシュネムに由来しているかもしれません。

そうすると、この女は、もしかしたらアビシャグかもしれません。アビシャグについての紹介は、列王記第一 1 章にあります(1-4 節)。ダビデを温めるために家来が探したのですが、ダビデは彼女と寝ようとはしませんでした。彼女はもっぱら王の介護をしていました。これをソロモンは、ずっと見ていたはずで、父が死に、その後、兄弟たちの間に権力闘争がありました。父の息子アドニ

ヤが、他のダビデの家来たちを自分に引き寄せて、父の死後、王権を自分のものにしようと企てました。けれども、ソロモンの母バテ・シェバと預言者ナタンによる俊敏な対応によって、その危機は免れました。

ソロモンが無事に王として即位しました。ソロモンはアドニヤに猶予を与えました。ところがアドニヤはハテ・シェバに、「本当は私が王になるはずでしたのに、主がそうされませんでした。その代わり言っては何ですが、シュネム人アビシャグを私に妻としてくれませんか。」と頼んだのです。ところがそれを聞いたソロモンは非常に怒りました。そしてアドニヤを討ち取らせました(1列王2章参照)。このようにソロモンは、アビシャグのことでかなり強い反応を示しました。王位が危ぶまれることもあったでしょうが、それだけではなかったかもしれません。ソロモンは彼女を愛していたのであろうと思われれます。

ここで、シュラムの女は熱烈にソロモンの愛を求めています。しかし、その求愛は、彼の愛や彼の名がぶどう酒よりもまさるといところから、ソロモンの愛から始まっています。名前は、聖書ではしばしば、その人の人格、性格そのものを表します。その人の外見以上に、その人の持っている富以上に、その人自身が慕わしいものになっているかどうかです。そして「私を引き寄せてください。」と言っていますが、ソロモンが率先しないと彼女は彼に近づくことはありません。そうです、男が女に言い寄るところから始まります。そして、相互の関係がなければなり立ちません。男を神は造られ、それから男から女を造られたのです。ですから、男が動かなければ女は動けないのです。イエス様も同じでした。私たちが神を愛したからではなく、神がキリストにあって初めに私たちを愛されたから、だから私たちはイエス様を愛します。

1:5 エルサレムの娘たち。私はケダルの天幕のように、ソロモンの幕のように、黒いけれども美しい。1:6 私をご覧にならないでください。私は日に焼けて、黒いのです。私の母の子らが私に向かっていきりたち、私をぶどう畑の見張りに立てたのです。しかし、私は自分のぶどう畑は見張りませんでした。1:7 私の愛している人。どうか教えてください。どこで羊を飼い、昼の間は、どこでそれを休ませるのですか。あなたの仲間の群れのかたわらで、私はなぜ、顔おいをつけた女のようにしていなければならないのでしょうか。1:8 女のなかで最も美しい人よ。あなたがこれを知らないのなら、羊の群れの足跡について行き、羊飼いの住まいのかたわらで、あなたの子やぎを飼いなさい。

ここには、自分のありのままをソロモンの愛の保証によって、受け入れているシュラムの女の人たちの姿があります。5 節を見てください、彼女が、自分が色黒であることを美しいと言っています。宮廷にいる女は外に出ていませんし、当時、中東では色白が美しいとみなされていました。ところが、自分が色黒であることを美しいということができているのです。それは一重に、8 節、「女の中で最も美しい人よ」とソロモンが愛によってそうみなしているからです。私たち人間、ことに女性は、自分のそのままの姿が受け入れられないのではないか、という不安を絶えず抱えています。そこ

からすべて、自分が何とかして受け入れられようと、あらゆることをします。そして、人は、自分たちの中で受け入れられる形式を作り上げて、その型に自分をはめようとして落ち着かせようとします。「美人」というのは、その典型例です。

ここに、シュラムの女の背景があります。彼女は、ガリラヤ地方の田舎で育っていた、素朴な女性でした。「母の子らが」と言っていますが、父は既に死んでいたのかもしれませんが、それで兄たちが父代わりをしていたのでしょう。兄たちが妹に怒って、それでぶどう畑の見張りに立てていました。そして、「自分のぶどう畑は見張りませんでした」と言っていますが、これは自分自身のことです。自分の顔のこと、体のことは世話する余裕などありませんでした、ということです。そんな時に、彼女がアビシャグなら、ダビデの家来たちが来て彼女に目を付けたのでしょう。それから、後に彼女はソロモンの妻として選ばれます。ですから、シュラムの女は突如として、ソロモンの寵愛により、王宮の妻に召し入れられることになるのです。

それで、彼女の心は非常に不安でした。「どこで羊を飼い、昼の間は、どこでそれを休ませるのですか。」と言っていますが、これは比喻です。ソロモンのことを羊飼いになぞらえています。「あなたの仲間の群れのかたわらで、私はなぜ、顔おおいをつけた女のようにしていなければならない」と言っていますが、この顔覆いは中東では売春婦にみなされます。昔、ヤコブの息子ユダが、通りにいた覆いをして嫁タマルを買ったという話が創世記 38 章にあります。つまり、たくさんの女たちがいるなかで、ソロモンは彼女には特別な愛を降り注いでいたけれども、そのような寵愛がかえって、彼女がふしだらな女に見られるのではないか、という不安を抱えていたのです。そこでソロモンはさらなる、愛による保障を与えます。

1:9 わが愛する者よ。私はあなたをパロの戦車の雌馬になぞらえよう。1:10 あなたの頬には飾り輪がつき、首には宝石をちりばめた首飾りがつけてあって、美しい。1:11 私たちは銀をちりばめた金の飾り輪をあなたのために作ろう。

今の私たちがこれを聞けば、ちょっと分からないどころか、失礼に当たるでしょう。しかし、この表現は女に対して、最高のほめ言葉を使っています。ソロモンは、馬が好きでした。しかも、馬の中でもエジプトからの輸入品は極めて優れたものであります(1列王 10:28-29)。そして戦車には、このように雌馬など付けません、雄の馬が使われますが、ソロモンはこのように飾り立てた雌馬があれば、その華麗で全ての人々が目を引きます。11 節は、エルサレムの娘たちがその装飾を後押ししています。

1:12 王がうたげの座に着いておられる間、私のナルドはかおりを放ちました。1:13 私の愛する方は、私にとっては、この乳房の間に宿る没薬の袋のようです。1:14 私の愛する方は、私にとっては、エン・ゲディのぶどう畑にあるヘナ樹の花ぶさのようです。

ナルドも、没薬も、そしてヘンナ樹の花ぶさも、みな香りを放つものであります。それを彼女は自分の胸のところなどに身に付けていました。ソロモンは今、宴の座にいます。ですから、数多く人々がいるけれども、そんなことも気にならず一心にソロモンを見つめ、ソロモンがいかに香しいかを表現しています。

1:15 ああ、わが愛する者。あなたはなんと美しいことよ。なんと美しいことよ。あなたの目は鳩のようだ。1:16 私の愛する方。あなたはなんと美しく、慕わしい方でしょう。私たちの長いすは青々としています。1:17 私たちの家の梁は杉の木、そのたるきは糸杉です。

ソロモンが再び、愛の保証を与えています。鳩の目に彼女の目を喩えています。それから、女もソロモンを慕わしいと言っています。そして長いすのこと、また自分たちの家のことを話しています。これは後に女が、ソロモンの家に入って夫婦として過ごすことを夢見ている姿です。

2:1 私はシャロンのサフラン、谷のゆりの花。2:2 わが愛する者が娘たちの間にいるのは、いばらの中のゆりの花のようだ。2:3 私の愛する方が若者たちの間におられるのは、林の木の中のりんごの木のようにです。私はその陰にすわりたいと切に望みました。その実は私の口に甘いのです。2:4 あの方は私を酒宴の席に伴われました。私の上に翻るあの方の旗じるしは愛でした。

シュラムの女は多くの女性と同じような美しさはあるかもしれないけれども、と控えめに言っているのに対して、ソロモンは「茨の中のゆりだ」と際立たせています。そして、宴の席では、彼女のための旗印を作っています。田舎娘であるはずの彼女が、こうした宴の場に出ること自体、数多くの女性たちがいる中でかなり身が引くのですが、そのことを気遣ってソロモンは、彼女のための席を旗じるしによって用意してくれたのです。これによって、自分が招かれた人であり、他の人たちから疑心暗鬼に思われる所から守られます。彼女を公でも守ってあげる配慮をしています。

このように、ただ愛しているというだけでは、不十分であることをソロモンは知っていたのです。愛というのは、えこひいきなのです。もし、愛が全ての人に等しいのであれば、それは定義からして愛ではありません。人は、自分が愛されていることを知るだけでは不十分です。自分が数ある人々の中で、それでも特別に愛されていることを知ることによって、愛されている保証を見つけることができます。私が教会に通い始めた当初、その宣教師の人が強い言葉でこう言ったのです。「たとえ世界にあなたしかいなくても、神はご自分の御子キリストをこの世に送り、あなたの罪のために死に渡してください。」驚きました、大勢いる中での自分ではなく、キリストはこの私を愛しておられるのです。それと同じように、男は女に対して愛しているという安心、守ってあげているのだという保障をきちんと伝えなければいけません。特に、公の場においては彼女は周囲の目に晒されています。だから、公のところで守ってあげる必要があるのです。

2:7 エルサレムの娘たち。私は、かもしかや野の雌鹿をさして、あなたがたに誓っていただきます。

揺り起こしたり、かき立てたりしないでください。愛が目ざめたいと思うときまでは。

かもしかや雌鹿は、非常に敏感な動物です。ちょっとした物音で飛び跳ねて逃げていきます。その動物に誓って、私を揺り動かしたり、かき立てたりしないで下さい、とお願いしています。つまり、ソロモンへの想いは非常に敏感で繊細なものなんだ、ということです。「愛が目ざめたいと思うときまでは」と言っているのは、恣意的に起こすことがあってはならないということです。彼女は時を待っているのです。

この言い回しはまた後で出てきます。そして結婚式を挙げ、初めての夜を過ごした後には出てきません。つまり、愛が目ざめたいと思う時とは結婚のことです。その時に向かって、彼女はじっくりと待っているのだということです。待つ、待つ、そしてその人に自分の一生を捧げるという誓いをした中で床入りする時に、結婚の奥義を知ることができます。最近、一般のニュースで四年半、付き合っていたけれどもキスすることも待ち、結婚式の時に初めてのキスをしたということが、話題になっていました。結婚まで待つということは消極的なことではなく、むしろ最も結婚というものを、最高のもの、最上のものとする積極的なものなのです。

2:8 愛する方の声。ご覧、あの方が来られます。山々をとび越え、丘々の上をはねて。

場所が移っています。ここは、彼女の故郷、田舎にある家です。そこに、ソロモンが彼女と、結婚前提の交際をするためにやって来ています。

2:9 私の愛する方は、かもしかや若い鹿のようです。ご覧、あの方は私たちの壁のうしろにじっと立ち、窓からのぞき、格子越しにうかがっています。2:10 私の愛する方は、私に語りかけて言われます。「わが愛する者、美しいひとよ。さあ、立って、出ておいで。2:11 ほら、冬は過ぎ去り、大雨も通り過ぎて行った。2:12 地には花が咲き乱れ、歌の季節がやって来た。山鳩の声が、私たちの国に聞こえる。2:13 いちじくの木は実をならせ、ぶどうの木は、花をつけてかおりを放つ。わが愛する者、美しいひとよ。さあ、立って、出ておいで。2:14 岩の裂け目、がけの隠れ場にいる私の鳩よ。私に、顔を見せておくれ。あなたの声を聞かせておくれ。あなたの声は愛らしく、あなたの顔は美しい。2:15 『私たちのために、ぶどう畑を荒らす狐や子狐を捕えておくれ。』私たちのぶどう畑は花盛りだから。」

彼女はイズレエル平野のシュネムというところにいます。そこは、今でもイスラエル有数の穀倉地帯であり、ここにあるように豊かな農耕地が広がっていたのでしょ。そこに、王なるソロモンがわざわざ、彼女の家のところまで来、呼び出しているのです。「冬が過ぎ去り、春がやって来た」と彼は言っています。イスラエルでは冬に雨が降り、土がぬかるみますので、移動する時は春になります。時期が来たので、ようやく動くことができたということです。けれども、ここにも隠喩があります。つまり、もはや結婚の時期が近づいていますね、ということです。二人は付き合いながら、じっ

くりとその時期が来るのを待っていたのです。

結婚前提の付き合いをする時に、私たちはとても繊細な時期を通ります。それは、もちろん互いが好きであることは分かっています。しかし、その付き合いの中でもしかしたら、その人よりも大切な事柄が出てくるかもしれません。そうしたら、その人と一緒になることはやめる、結婚する前にこの婚約を破棄する、ということもあり得るのです。それが妥当な理由であれば仕方がないのですが、そうではなく自分の軽率な選り好みでやめてみることは、結婚の根底を崩すものであり、その人は結婚する資格がありません。これはあらゆる人間関係、また教会生活にも通じることです。いっしょにいろいろと活動することはするにしても、相手にとってとても大切な時に、その肝心の時に限って自分の都合を優先するというのは、相手を裏切ることになります。それは、相手も犠牲を払って、自分を優先させてきたのに、その愛を裏切る行為になるのです。友が苦しんでいる時にこそ、その友情が試されるといことが箴言に書いてありますが、大切な時に自分の都合を持っていくのです。このようなことをする人には、愛がありません。

ですからソロモンはここでも、愛の保証を与えています。シュラムの女は、家からなかなか出てこない様子です。「岩の裂け目、がけの隠れ場にいる私の鳩よ。」と言っています。そして、彼女がようやく外に出てきたのですが、そこには「狐や子狐」がいます。これらも追い散らしてくれ、と言っています。もしかしたら、これはソロモンではなく、シュラムの女が言った言葉かもしれません。彼女が外に出ていくということは、それが田舎の人々に知られるのですから、そしてソロモンがいつまでもいるわけではないのですから、彼女が悪く見られる、ひどければ晒しにされてしまう、ということも有りうるのです。こうやって付き合いの時から、相手をいかに守っていくのか、結婚した後にすることの予行練習をしています。

3:1 私は、夜、床についても、私の愛している人を捜していました。私が捜しても、あの方は見あたりませんでした。3:2 「さあ、起きて町を歩き巡り、通りや広場で、私の愛している人を捜して来よう。」私が捜しても、あの方は見あたりませんでした。3:3 町を歩き巡る夜回りたちが私を見つけました。「私の愛している人を、あなたがたはお見かけになりませんでしたか。」3:4 彼らのところを通り過ぎると間もなく、私の愛している人を私は見つけました。この方をしっかりつかまえて、放さず、とうとう、私の母の家に、私をみごもった人の奥の間に、お連れしました。3:5 エルサレムの娘たち。私は、かもしかや野の雌鹿をさして、あなたがたに誓っていただきます。揺り起こしたり、かき立てたりしないでください。愛が目ざめたいと思うときまでは。

シュラムの女は、ソロモンとの結婚が近づくにつれて、わずかな不安との戦いの中で、ますます込みあがってくる結婚への願望が夢の中に表れています。「夜、床についても」というのが、夢を見ていることを示しています。何かというと、彼が自分から離れてしまうのではないか、という恐れです。まだ婚約はしていてもまだ誓約していないのですから、離れてしまう可能性はゼロではないのです。それで、夢の中で、見つけたソロモンをしがみついて離さず、それで自分の母の奥の間に

連れて行って、そこで結ばれるところまで夢の中で見えています。これは試みの期間です。私たちも、主が来られるまでは試みの期間です。自分はあらゆるものを捨てて、この人に結ばれるために捧げる準備をします。しかし、それを両者がそれぞれ行なっていなければ、傷つきます。近づけば近づくほど、心の中での葛藤、せめぎ合いが続くのです。

しかし、彼女は待っています。先ほどと同じ言い回し、「揺り起こしたり、かき立てたりしないでください。愛が目ざめたいと思うときまでは。」を使っています。結婚になるまで、かき立てないでくださいと願っています。そうです、性的な結びつきは、そこに至るまでの、しっかりとした吟味、自分の計画であるとか、動機、現実的な経済状況、そして価値観を共有しているかなど、いろいろな意味で調べていくことが必要です。完全に相手にささげる誓いが結婚です。そしてついに婚礼が始まります。

3:6 没薬や乳香、貿易商人のあらゆる香料の粉末をくゆらして、煙の柱のように荒野から上って来るひとはだれ。3:7 見なさい。あれはソロモンの乗るみこし。その回りには、イスラエルの勇士、六十人の勇士がいる。3:8 彼らはみな剣を帯びている練達の戦士たち。夜襲に備えて、おのおの腰に剣を帯びている。

当時の婚礼は、花婿が行列を作って、花嫁の家まで迎えにいくところから始まります。そして、花嫁を引き取り、自分の家に招き入れます。そしてそこで婚姻、その後の祝宴があります。そして、二人きりになって、結ばれるのです。この初めの花嫁を迎えるための行進の様子が書かれています。十人の乙女のたとえを思い出してください、それがその行列の場面です。既に、この行列がイズレエル平原にあるシュネムまで行き、彼女を引き取り、それからその行列がヨルダン川沿いを南下しました。それからエリコの辺りで右に曲がり、エルサレムに上って行きます。そこはユダの荒野です。それで今、荒野から上っていると表現しているのです。

もう一度、シュラムの女が田舎に住む普通の女の子であったことを思い出してください。その女性にソロモンが王の妻として迎えます。彼女の不安を想像してください、けれどもソロモンは彼女にあらゆる飾り物を付け、あらゆる香料を放つようにさせて、王の花嫁として、このみこしに運んでいるのです。6 節にある香料は、彼女から放たれるものです。彼女が確かに、ソロモンの愛する花嫁としての好意を受けています。そしてソロモンは、しっかりと彼女の乗っているみこしを、精鋭部隊によって護衛させています。ガリラヤ地方からエルサレムまでは長い距離です。そこには、イエス様が良いサマリア人で半殺しにされた男のたとえを話されましたが、強盗がいたり危険であります。それについても、ソロモンが彼女に愛の保証を与えて守り、このような護衛をつけています。私たち

3:9 ソロモン王は、レバノンの木で自分のためにみこしを作った。3:10 その支柱は銀、背は金、その座席は紫色の布で作った。その内側はエルサレムの娘たちによって美しく切りばめ細工がさ

れている。3:11 シオンの娘たち。ソロモン王を見に出かけなさい。ご自分の婚礼の日、心の喜びの日のために、母上からかぶらせてもらった冠をかぶっている。

このみこしは、ソロモンが命じて作らせたものでした。そこは移動する玉座でありました、ですから中に銀や金、紫色の布が作られています。ソロモンが、母バテ・シェバが用意した冠をかぶっています。これは、王冠ではなく、婚姻のための特別な冠ということです。

4:1 ああ、わが愛する者。あなたはなんと美しいことよ。なんと美しいことよ。あなたの目は、顔おおいのうしろで鳩のようだ。あなたの髪は、ギルアデの山から降りて来るやぎの群れのよう、4:2 あなたの歯は、洗い場から上って来て毛を刈られる雌羊の群れのようだ。それはみな、ふたごを産み、ふたごを産まないものは一頭もない。4:3 あなたのくちびるは紅の糸。あなたの口は愛らしい。あなたの頬は、顔おおいのうしろにあって、ざくろの片割れのようだ。4:4 あなたの首は、兵器庫のために建てられたダビデのやぐらのようだ。その上には千の盾が掛けられていて、みな勇士の丸い小盾だ。4:5 あなたの二つの乳房は、ゆりの花の間で草を食べているふたごのかもしか、二頭の子鹿のようだ。

ソロモンは、ずっとあなたは美しい、最も美しいと言っていました、今、彼は確かにその美しさを最上の喜びで享受しています。その表現たるや、私たちにはイスラエルの自然など、想像するのが難しいものがありますが、彼は彼女の目から見ています。そして歯を見て、唇を見ています。そして頬を見ていますが、まだこの時点で顔覆いがあります。そして首を見ていますが、興味深いです、ダビデのやぐらのようだ、と言っています。まっすぐになっていたのでしょうか。そして最後に乳房です。これが普通の男であれば、もし相手に対する真実な愛がなく、単なる肉欲に任せるのであれば、見る場所がそこからでないことを知っているでしょう。カナン人の偶像アシュタロテが、乳房が異様に大きく、しかも数多く作られているところからもよく分かります。ソロモンは、彼女の肉体を欲しているのではなく、彼女そのものを、人格をもって本当に愛しています。だからこそ、まず目を見るのです。そこから、意思疎通、人格の交流をしています。

4:6 そよ風が吹き始め、影が消え去るころまでに、私は没薬の山、乳香の丘に行こう。4:7 わが愛する者よ。あなたのすべては美しく、あなたには何の汚れもない。

シュラムの女が、彼が彼女の家に行き、お付き合いをしていた時に 2 章 17 節で、この言葉を言っていました。ソロモンは、今その願いをかなえてあげるよ、と言っています。

そして、ソロモンは再び、「あなたは美しい」と言っています。しかも、「あなたのすべては美しい」と言っています。今、彼女の全てを見ることができていますが、その全てを見ても美しいと言っているのです。しかも、ここで「あなたには何の汚れもない。」と言っているのです。ここで大事なのは、彼女に欠けたところがなかったということではありません。愛しているからこそ、何の欠けもない、

美しいとみなすことができるのです。これは、いわゆる「愛は盲目だ」ということでもありません。確かに色黒であり、田舎にいる一人の娘です。彼女はその弱さや弱点を知っていましたが、その中にもあっても自分はソロモンの愛のゆえに、全く美しいものとみなしています。主は荒野で宿営するイスラエルの民のことを、そのようにみなしていました。「ヤコブの中に不法を見いださず、イスラエルの中にわざわいを見ない。(民数 23:21)」「なんと美しいことよ。ヤコブよ、あなたの天幕は。(24:5)」神の一方的な愛は何も不法を見ない、なんと美しいことよ、と言わしめるのです。

4:8 花嫁よ。私といっしょにレバノンから、私といっしょにレバノンから来なさい。アマナの頂から、セニルとヘルモンの頂から、獅子のほら穴、ひょうの山から降りて来なさい。4:9 私の妹、花嫁よ。あなたは私の心を奪った。あなたのただ一度のまなざしと、あなたの首飾りのただ一つの宝石で、私の心を奪ってしまった。4:10 私の妹、花嫁よ。あなたの愛は、なんと麗しいことよ。あなたの愛は、ぶどう酒よりもはるかにまさり、あなたの香油のかおりは、すべての香料にもまさっている。4:11 花嫁よ。あなたのくちびるは蜂蜜をしたたかせ、あなたの舌の裏には蜜と乳がある。あなたの着物のかおりは、レバノンのかおりのようだ。

ソロモンが 8 節で言っているのは、いっしょにこの喜びを共にしようではないか、ということです。ちょうどジェットコースターで一番上に上がって、これから落ちるといふその興奮を、山から降りることによって表現しています。そして 9 節からは、接吻と前戯です。

4:12 私の妹、花嫁は、閉じられた庭、閉じられた源、封じられた泉。4:13 あなたの産み出すものは、最上の実をみならずざくろの園、ヘナ樹にナルド、4:14 ナルド、サフラン、菖蒲、肉桂に、乳香の取れるすべての木、没薬、アロエに、香料の最上のものすべて、4:15 庭の泉、湧き水の井戸、レバノンからの流れ。4:16 北風よ、起きよ。南風よ、吹け。私の庭に吹き、そのかおりを漂わせておくれ。私の愛する方が庭にはいり、その最上の実を食べることができるように。

閉じられた庭、封じられた泉と言っていますが、彼女が処女であることを意味しています。そして、16 節は女のほうに答えています。夫をすべて自分が受けている姿です。庭に北風と南風が吹くようにというのは、植物が育つための風ですね。東風ですと、乾燥していて作物をからすことは聖書に多く出ています。そして 5 章の 1 節も続きです。

5:1 私の妹、花嫁よ。私は、私の庭にはいり、没薬と香料を集め、蜂の巣と蜂蜜を食べ、ぶどう酒と乳を飲む。友よ、食べよ。飲め。愛する人たちよ。大いに飲め。

ソロモンが彼女の庭のことを自分の庭と言って、彼女の物が自分の物となったことを言い表しています。つまり、一心同体になったということです。「泉」という表現が使われていましたが、泉は聖書では御霊によって新たに生まれた人にもイエス様が使われた比喻です。私たちの尊厳、充足、安定、そうしたものが含まれている泉であります。しっかりとした夫婦の性生活ができていることは、

妻も夫も安定した情緒を保つことができ、精神的にも、霊的にも健全さを保つことができます。

そしてそのような親しい交わりは、完全に互いに明け渡し、他のものから離れて、相手に結びつくことを選んだからこそ、できることです。

2A 婚姻後 5-8

そして5章からは、この夫婦愛が円熟していく姿を見ていくことができます。その中で、愛のすれ違いが起こります。結婚する前での心の準備というのも大事ですが、結婚してからその初めの愛を保っていることができるのか、イエス様がエペソの教会に言われた「初めの愛」からいかに、離れないでいるのかが、問われていきます。それが5-6章に書かれており、そこからの回復があります。そしてシュラムの女が他の王妃やそばめからもほめられている姿、威厳のある姿を見ます。まさに、箴言 31 章のすぐれた女ですね、そして7-8章において、ますます夫婦愛が強くなる円熟した関係を見ます。そこに、熱烈に一体化される二人の姿があり、シュラムの女の家においてソロモンが相手の家に対して彼女を受け入れていく姿を見ます。

けれども、これからのことは、ぜひ雅歌 5-8 章のメッセージをロゴス・ミニストリーで聞いてください。結婚をする時に、求婚をする時に、それは始まりであり終わりではないのだということを知ることが大切です。今の男女の情熱よりも、年を経るごとにそのロマンスが増えていくというのが雅歌の流れです。それは、二人がここまできめ細かく、主にあって互いに献身しているからであり、そこに出てくるロマンスなのです。したがって、男が女に結ばれ、二人は一体となるという奥義が楽しめます。